

---

# 東方非想ZUN則

点愚

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方非想ZUN則

### 【Zコード】

Z01020

### 【作者名】

点愚

### 【あらすじ】

東方Project一次創作。

怠惰で夢想家な店主を愛して。

東の方の、怠惰で夢想家な店主と彼女達の物語。

…を氣味の悪い妄想で書いた作品です。

基本的に彼女達は店主に…な作品なので、気分を激しく害される方がいると思います。

そんな方は、こんな物より素晴らしい作品を見に行って下さい。  
それでも読んで下さる方は、私の文章力に難ありますので、お気をつけて。

ネタバレ含む所もあります。さらに、原作崩壊当たり前。誰ですか？この人な部分ばっかりです。

基本的に一話完結？の体裁を取っていると思います。一応各話独立していて、最後にリフレインしたりしないと思います。

多分続く内に、無茶くちゃになると思います。その時はその朱鷺で。

…注意はしましたよ？

雨粒が屋根を叩き、不規則で弱々しくも、優しく音色を生み出す。

こんな日は、本の世界に浸かるべきだらう。

昔から晴耕雨読、といつよつ。アリリメツ。

まあ、晴れでも本は読むが。

先程注いだ茶を啜る。

程よく冷めたそれは、絡みがちな思考をほぐしてくれる。

本とは情報。その情報を自ら考察して初めて知識となる。

考察のない情報は只の情報でしかない。

食物の様に、咀嚼することで消化しやすくなり、血の血肉となる。

考察とは、咀嚼し消化することと言える。

故に、読書の際思考が絡み、止まってしまうことは、最も避けるべき事である。

消化しなければ血肉にならない。

ただの無意味な行為に終わる。

それでは本が死んでしまう。

道具とは用途から外れてしまえば、ただの「ノリ」に成り下がってしまう。

それは道具に対する冒涜以外の何物でもない。  
そんなことは許されでは行けない。

読みもしないのに、価値があるというだけで、死ぬまで借りて行き、  
鍋敷きにつかうなど言語道断である。

決してお気に入りの本を持つてからで、見事に表紙が田もあてられ  
ぬ事になつたことを言つてはいるわけではない。

あくまで道具、本に対する心構えを言つてはいる。

…あの本は表紙の彩りも素晴らしいのに。

ともかく、いずれあの娘にはキツく言わなければ行けない。

…聞く耳があるかは分からぬが。

すっかり冷えきつた茶を飲み干して、茶を注ぐ。

湯飲みから伝わる熱が心地よい。

気付けば、雨は強さを増し寒さもつこでに増していた。

長く椅子に座つて居たせいか、立つと体の節々が小気味よい音をな  
らす。

一際大きく伸びをし、ストーブの元に向かう。

外の世界の道具だが、大変に便利だ。

もつとも、使い続けるための障害がとても厳しいが、寒さには勝て

ない。

ストーブに火を入れ、またいつもの場所に座る。

ゆらゆらと燃えるストーブを眺める。

流石に徹夜で本を読んでいたせいか、店内がじんわり暖まって来る  
と、自然と瞼が重くなる。

このまま、瞼を閉じてしまつても良いか。

ぼやける思考の中、なんとか糸を挟む。

とりあえず、眠るか

僕の意識はそこで落ちた。

なせりの呪は、あれいく回かつのだらひ。

しかも、こんな雨の中。

『主人の探し物も、寺の買い出しもないのに。

たしかに、あれは面白い場所ではある。

見たこともない道具が並び、それらしい雰囲気を醸す店。

道具に興味がある奴には、いてもあきない場所だ。

だが、わざわざこんな雨の中出向く所では無かつたはずだ。

用事でいくなら、割と乗り気にいけるところくらいだ。

だが、今の私には用事もない。

日々の習慣だらうか。

最近は何かにつけてあそこへ行かれていたから、行かなければ落ち着かないのだろうか。

わからない。

そもそもあそこは道具だけなら問題はない。  
だが、そこの店主に問題が大有りなのだ。

あそこの店主は、基本的に怠惰というか、なぜ店を開いているのか疑問に思う。

客が来たのに、全てが無愛想な対応。

本から顔を上げずに客を出迎える店主がいるだらうか。

さうして気に食わないのが、初めてあそこを訪れた時の店主の対応だ。  
私が欲しいものが宝塔と聞いて、商売のチャンスと思ったのだろう、  
急に愛想のいい態度に変ってきた。

最初からあの態度だつたらまだ許せるが、宝塔の価値と私の状況を  
知つた上だとね。

お著繰られているとしか考えられない。

こちらも賢将で毘沙門天の使いだ、馬鹿みたいにお著繰られている  
わけにも行かない。

しかし、私が色々言つても奴は見事に返して來た。

あんなに怠惰でいけすかない奴に、しつかりとした知識があるから、余計に悔しい。

結局は奴の言い値で買つたが、あんなに私と対等以上に論議した奴は初めてだ。

本来なら喜ばしいが、あんな怠惰店主と同等と思うだけで、胸が騒ぐ。

あの時は氣苦労が多くて、「何やら顔つきが変わりましたね。何かあつたのですか?」

なんてご主人に言われてしまつたし。

それだけあの店主の相手はつらいのだ。

初めての来店からそんな有様だつたし、一回田からはもつと酷い。

勝手に長々と喋りだし、聞かなければ拗ねるし。

拗ねたら今度は接客が悪くなるし、仕方なく聞いてやれば子供みたいに楽しそうにまた喋りだし。

本当に分からん店主なのだ、アイツは。

それをご主人達に愚痴つても、私の誇張と思つのか、微笑みを浮かべて聞くだけだ。

… さりにあの店主は魔女と巫女にやたらと甘い。

あの二人の我が儘をなんだかんだで聞いている。  
それが私と商談中にも関わらずだ。

店主として、客を優先すべきだろつてーと私は思つね。

本当に度しがたい店主だ。

愛想がないし、無駄話は長いし、足元見るし、魔女と巫女には甘い。

その癖普段の無愛想からは想像できなくらい、表情が変わるし、知識はちゃんとあるし、不器用だがたまに優しいし、不思議と居心地が良いと感じてしまう。

問題が大有りだ。

それなのに、

何故私は、あんな店主がいる店に行くのだろう。  
何故私は、この古ぼけたドアを開けるのに時間がかかるのだろう。

なぜこんなにも気分が揺れるのだろう。

なぜこんなにも満けるのだろう。

なぜこんなに、心臓が早いのだろう。

「星、あの娘を見ませんでしたか？」

襖が開き、聖が顔を出す。

「彼女はいつもの所に行きましたよ、聖。」

微笑えましいじゃないですか、と付け加える。

「ふふつ、彼女も大変ね。」

本当に優しく、聖は微笑む。

「彼女は自分の中は探せないようですね。今の自分の気持ちが何なのか、見つけられないようです。」

と、小さなダウザーを想い、私も微笑む。

「彼女なら、きっと自分の気持ちを探し当てるでしょう。彼女も妖怪である前に、女の子なのだから。」

見つけてから、彼女はどうするのだろうか。

駆け引きは彼女の得意分野だが、果たして、それが活かされるのか。

毘沙門天代理は魔法の森の方向を見ながら、彼女に頼む、次の使いを考えていた。

## 2話 星の絵画のわな蛙（後編）

まずはダウザーです。

鈍いナズーと鋭いつつかりわん。

1面と5面の立ち絵の違いと、サブタイトルの場面の会話と、気持ち悪い妄想が材料です。

お口に余れば幸いです。

何を書いてこらせるやう。

わつと私も足下がお離行。

ただ必死に頑張った。

闇雲に、もがいた。

いつかは、やつよがれることを翻見て。

けど、それが只の空回りになつたのはいつからだらう。

師の教えもなく、上ばかりを見て走っていたのだ。  
足下がお留守になり、転んでしまうのは当然だ。

なお悪いのは、転んだ場所に田をやるのもなく、なおせり上を見て走りだすことだった。

こんな所で転んでいては、上には行けない。もとと上を見て走らなければ

しかし自分ではそんな姿に気が付くはずなどない。  
上を見ていれば、自分の姿など、見ることなどないから。

そうして上を見て走っているから、自分の失敗といつ石に躓いても、  
その石をなかつたことにしてよいとする。  
なぜ躓いたかも考えない。

ひたすら走る。

上を向いて。

しかし、何時までたつても少しも近づけない。

そんな時だ、あそこへ行ったのは。

待っていたのは、雪、理不尽、寒さ、雪、店主。

遠い上を見ながら走っていた私が、少しくらい上から落ちてきた雪  
に埋まるのだ。

その時点で、自分の走り方に問題があると気付けない我が身の未熟。

上ばかり見ていた私に、あの人は本当に酷い扱いをしてくれた。

だが、それが良かつたのかも知れない。

あそこに行くたびに、転ばないよつて、足下を見る癖がついたのかもしれない。

その日から、少し足下を見ながら走るよつになつたと思つ。

気が付けば、躓いた理由も、次に躓かない方法も考えるよつになつた。

その次には、躓いた時の対処も考え実行していった。

あの店では転べない。

そう思つた切つ掛けは、あそこで転んだら、口ではすまないから。

転んだ先に、店主がさらに追い討ちをかけるのだ。  
さすがな未熟でも、それは嫌だ。

だから、この人の前では転べない。怖いから。

そう思つていたのだが、それもいつしか変わつて來た。

何が切つ掛けかはわからない。

褒めてくれる顔、心配してくれる顔。

叱る声に、優しい声。

つまりなそうな表情と、子供のように輝く笑顔。

きっと思い付く全てがそうなのだろう。

恋とは何が切つ掛けになるか、どうしてその人なのか、きちんと分かるようなら偽物の恋よ、と宴会で幽々子様が言つていた。

言われた時は、余り判らなかつたが、今ならよくわかる。

…気がする。

いつの間にか、走る道が少し変わりつつある。

一人前を目指して走つていた筈が、あの人の横を目指して走つている。

でもあの人の横に立とうとするなら、一人前になつてからだ。

だから今度は、しつかり足下を見ながら走ろ。

この道は険しく危険だから。

走るのは私一人じゃないから。

あの人見てる所で転ぶのは、恥ずかしいから

## 3話 ロード制約（後書き）

あの挿絵は反則。

店内のやり取りも反則。

ついでにここまで来てくれた人の器も反則。

うーん、暇をつぶせる相手がない。

只でさえ暇なのにこの雨では、何処にも行けないではないか。

空を睨んでも、返事は大量の水しか返つてこない。

溜息を飲み込むように、カップに口をつける。

今年の夏は、特に大きな騒動もなく、退屈だった。

毎年恒例の夏の異変は、私が出張るような物でなかつたし。

まあ、去年もそうなのだが、一応顔見せ程度に関わった。

それ故に暇潰しになつたからよかつたのだが。

雨音が、耳に厳しい。

せめて、雨で無ければ。

退屈を潰しに外にも行けるのだが

もう一度空を睨む。

謝罪のつもりか水が多くなった。

嫌みなやつめ。

この調子では寝るまでずっと雨だらけ。

本当に暇だ。

「何か暇潰しの話はないの？」

近くの眼鏡メイドに尋ねる。

このメイドが羨ましい。

小さなことでこんなにも楽しそうに居るのでから。

話を振つておいてなんだが、メイドの話は右から左へ聞き流す。

何か別の話が出るかと期待したが、結局は似た話だった。

まつたく、従者が主人を不快にさせてしまう。

私はメイドが話すその内容が嫌いだ。

理由は簡単。

聞いて不快になるからだ。

それだけ。

聞けば不快になる。

ただそれだけ。

細かい理由がわからないから、大きな理由で十分だ。

不快になる理由を、わざわざすべり上げるなど、馬鹿のやることだ。

「少し眠るから、もう下がつていい。」

そういうと、この従者は一礼し部屋を出ていった。

従者もいな部屋で、ベットに入る。

ふと思いつくのは従者の話。

私は、そんな一面を知らない。

そもそもそこに行くことが従者より少ないから仕方ないが、その事が余計に話を不快なものにする。

馬鹿か、私は。

不快な理由を考えるなど。

溜息を吐きながら思ひ。

あれと何じみつて溜息が板についた気がする。

何か言ひと決まつて溜息。

無茶な注文を聞いてくれるととも、店に入ったときも、由黒鼠のよ

うに膝に座つたときも、溜息。

本当に溜息だらけだ。

本当に、こつからなのか。  
なぜこいつなつてしているのか。

本当に、気が付けば

なまじつもあそこへ足を向けたくなるのか。

溜息一つ。

あれは今は何をしてゐるのやう。

…一つ。

雨が降つては冷やかしにも行けない。

…一つ。

明日、雨が上がったらいで見てみよ。

： はあ。 結局溜息。  
我ながら情けない。

私は、暇を潰せる相手が店主しかいないので。

## 4話　逢目不利（後書き）

逢う日が不利。

変化球です。

お嬢は恋煩い。

従者について。

時間を止めます。

冥土です

てんねんです。

しじつしゃです。

ね。

上の矢印の部分で気分を害される方もいると思いますが、抜き出してひらがなに直して調べれば、すこしほッコリできるかと思いま



毎年夏には異変が起る。

もはや幻想郷で暗黙のルール。

しかし、今年は私が異変を感じるものはなかった。

まあそのかわり、今も継続中の異変が起きていく。

季節は秋だけど

雨降りの夜は寒い。

それが秋になると尚更。

程よい熱さのお湯を急須に入れる。

葉が開くまで少し待つ。

ここで焦つてはいけない。

急須を持ち、愛用の湯飲みに注ぐ。

寒いから、私は暖かいお茶を飲む。

冷えた手から始まり、口、喉、胃。

そして冷えた全身に熱が伝わる。

ああ、たったの一口で、こんなにも満ち足りた気分になれるから、  
寒い日のお茶は好きだ。

また一口お茶を啜り、ほっと息を吐いた。

先程干した服が田に入り、早めに乾く事を祈る。

今日は、里に用事で行っていたのだが、帰つてくるときに風に煽られ傘が壊れてしまった。あのボロ傘め。

そのせいで、雨に打たながら飛ぶ羽田になつた。

当然着ぐるりにはびしょ濡れ。

入るなり着替えて、一気に干している。

濡れた服から、乾いている服に着替えるだけで、暖かいと感じるのは、少しおもしろいかも知れない。

新しい傘を用意しないとなあ、と思いながらお茶を啜る。

お茶うけが欲しい所だが、探してもないから仕方ない。

雨の音を聞きながら、ぼーっとしているのも些か飽きた。

何が暇潰しになるものは  
手近にあつた本を取る。

適当にパラパラめくる。

挟んだ栄が落ちたが、後で拾つことにする。

内容はいまいちだが、雨音を聞きながらの読書は悪くないかも知れない。  
と思う自分に微笑みたくなつた。

暖かい空氣のおかげで、実に快適だ。

先ほどまでの寒さはどうやら。身も心も暖かい。

本当に、今は異変の真つ中最中だとつぶつぶ思つ。

秋なのに、春のような陽気が私を包む。秋春異変でといひかしら。

お茶の一杯でいつもよつぽかぽかするし、只の着替えでもぽかぽか  
する。…着替えはいつも思つからりちよつと違つかな？

それに読書なんかしない私が、雨の日の読書を悪くないなんて思つ  
とは。

そのことだらう。ぽかぽか。

何をやつてもぽかぽか暖かくなるから、この異変は好きだ。…ぽかぽか異変にしよう。

予定を決めて、何をするか考えても暖かい。

この異変は長く続いている。

いつまで続くのかは、いつもの勘でもさっぱり。  
でも、少なくともこの場所にいる限りは、勘がなくても続くことがわかる。

そして原因だつてわかつている。

この店だから、

この人がいるから、

私の秋春異変が起つて。…ぽかぽか異変は少々恥ずかしい。

お茶を一口啜る。湯呑みを新しく持つてこうかしら。

服をいじる。今回は着る服がないから仕方ないな、とか言つてそうね。

袴を拾う。袴はどこに挟んであつたかな?まあいいや。

ヤカンを取る。ストーブつて便利ね。いつでも暖かいお茶が飲めるじゃない。

いつもの場所で、眠る店主を見る。私の春度が高くなる。

起きたら、何から話そつかな。

5話 バネ。（後書き）

ベネ。

春です。

秋だけど春です。

ディモールトベネ。

鈍感はいけないわね、鈍感は。

先程から見ていたのに、気付かないなんて。

隙間から上半身だけ出し、今しがた寝入った店主を眺める。

外の道具を扱うこの店は、下手な妖怪よりも危険。  
と言つてもここには電気も無いし、肝心の使い方だって分からぬ  
のだ。

昔のよつて、この店と店主を監視する意味もない。

要は監視といつ名田が欲しいだけ。

私にとって、幻想郷が全て。

維持の為にこんなこともやる、との噂があるが、火の無いところへ  
なんとやう。

そんな噂や、私の力もあって、今や大妖怪やら妖怪賢者とまで言わ  
れるようになるまで、あまり時間は掛からなかつた。

私自身、その在り方を受け容れている。

大きな箱の中に、明確な仕切りが無くては混沌しか生まれない。

そのためには、仕切りを維持する者が必要。

その役割を担うためにも、その在り方は都合が良い。  
故に私はそう在ってきた。

私を前にすれば、恐怖と絶望をもつて接する。  
その方が色々やりやすい。

⋮ 例外もいるが。

だから情けないことに、動搖した。

私が言つた例外とは、あくまでも私と同等に近い力を持つた連中だ  
つた。

だから、動搖してしまつた。

こんな無防備で眠りこける、なんの力もない半妖に、大妖怪でも賢  
者でもなくも扱われたことに。

この店が開けられた時から、こここの存在は知っていた。

外の道具をも扱い、外の世界を夢想する店主は、危険だと容易に判断できた。

しかし彼も店も幻想郷の一部。  
しかもなんの力もないのだ。

早々に潰すこともないと、傍観を決めた。

本当に危険な物を、理解して使う時がくればその時に消せばいいだけなのだから。

しかしこの店主は本当に、怠惰に夢想するだけだった。

晴読雨読で、野心はあるが、大繁盛という微笑ましいものだし、外の世界を知りながら、それに飲まれることもない。

非常に興味深い店主だった。

特にその知識。

まったく分からぬ外の道具を、自らの知識で解いていくのだ。  
当然、外の物は外の概念で存在する。しかしここにはその概念すらない。だからここで外の物を理解することは不可能。

だというのに、彼は自ら蓄積したこここの概念全てを駆使して理解しようとする。

そして外の概念を知るものからすれば、正氣を疑う理論にも関わら

ず、見事に正解を導く。

その考察は、ずっと聞いても飽きないものだ。

在るべきままに在り、知識を高め、それを確かめる。本当に、知識人だったのだ彼は。

そんな店主に、私も興味を引かれ、店を訪ねた。まあ、たまにちよっかいはだしていたけど。

店に入るなり、私は愉快で仕方なかつた。

恐怖と絶望以外の理由で、会つたことを後悔されたのは初めてだつたから。

それは顔を合わせる度に、より顕著になつていった。それも、知人としての範疇で。

本当に、彼には驚かされてばかりだ。

外の世界を知りながら、それでも飲まれず、しっかりと幻想を想う。

自らの知識で、本当に無から有を導きだせる。

野心家の癖に怠惰で。

理知的で達観しているのに、夢想家で子供のよつで。無愛想なのに、心の機微がすぐに顔に出て。

一介の半妖が、これほどまでに興味を引く存在とは、誰が思えるだ  
ろう。

大妖怪たる私に、孤独を気付かせるとは、彼には想像すらできない  
だろう。

妖怪賢者の私に、彼と過ごす時間が安らぎを『えているとは、本人  
は夢にも思わないだろう。

一介の半妖に、大妖怪や賢者と呼ばれる者が恋をするなど、誰が想  
像し得ただろう。

私自身、恋などするとは夢にも思わなかつた。無論相手が一介の半  
妖など。

妖怪とは、精神に依存する生き物。

そして恋とは精神が無くてはあり得ない。

肉体に依存する人間ですら、恋には大きく左右される。

妖怪である私は、心うなるのだらう。

不安もあるが、それ以上にこの満ち足りたものが、私を幸せな気持  
ちさせてくれる。

未だ眠りこけた店主の銀髪を撫でる。

今は閉じられている金の瞳は、これから何を映していくのか。

願わくばその光景を、寄り添つて共に見ていくたい。

願わくばその瞳一杯に、私を映して欲しい。

恐らく、私は手遅れだ。

この想いになら、潰されても構わないと思つてしまふのだから。

## 6話 ふう…（後書き）

賢者の時間です。

あの勝ち台詞は憂いでいるのでしょうか。

店主に心のスキマを突かれました。

小さい頃に麻疹やつてなくて、大人になつてかかるとエライ目にあう感じ。

違つた。

体に吹き付ける風と、身をわす寒さに目を開ける。

確かストーブはつけたまま寝たはずだが、なぜこんなにも寒いのか。

寝惚けた目を擦る。

次第に晴れる視界は健気にも働くストーブを捉える。

じつやら頭も早く起こさなければいけないようだ。

店の番が無残にも倒れている、この状況を整理するために。

何回目だろうか、入り口の扉が吹き飛ばされるなど。

悲しいかな、慣れてしまつた大工業のおかけで無事修復し、店内に入れる風が止まり、寒さが和らいできた。  
心なしか軽くなつたヤカンから、急須へ湯を注ぐ。

茶を飲みながら、考える。

入り口付近の札、心なしか軽くなつたヤカン、靈夢の湯呑み、干してある巫女服。

…靈夢か。

溜息と呆れしか出ない。

雨宿りをするなら、もっと落ち着いてほしいものだ。

案外早めに犯人が分かり、ツケ張を開く。

ああ、次のツケ張を用意しないと。

扉修理の手間代を気持ち高めに書き、閉じる。

色々動いたおかげで目が醒めた。

先程の本に手を伸ばし、続きを読む。

… いの店では寝て いる間に色々してくれるのは 妖精でなく巫女のよ

うだ。

僕の代わりに本まで読んでくれたようだ。

有り難すぎて涙が出る。

… 今日は厄日のようだ。

ガランガラン

久しぶりに仕事が出来て嬉しいのか、いつもより騒がしく音を鳴らす呼び鈴。

「入ってくるときは、もう少し静かに。」

ちりこと入り口を見やり、来訪者に言葉をかける。

来客ではないのが残念だ。

「服を取りに来たわ。乾いてるでしょ?」

そういうと彼女は勝手に奥まで入つていく。

やれやれ、と溜息一つ吐き、彼女の服を取りに行く。

丁寧に置んだ巫女服を取つて戻ると、彼女に渡す。

「まったく、雨宿りは仕方ないが、せめて店を壊さなにように頼む

よ。」

椅子に座り、勝手にお茶を飲む靈夢に釘を刺す。

「悪いネズミを追ははらつてあげたんだから、仕方ないのよ、それは。」

大した問題でもないよう言い放つ。

「それは有難いが、せめて起こして行くなり、直すなりして欲しかったよ。」

「あんなに気持ち良わさうに寝ていたら、起こすのも気が引けるつてものよ。」

ニヤリと笑いながら、煎餅をかじる。

「それに、ネズミを追いかけ回していたから直す暇なんて無かつたわ。」

お茶のおかわりを僕にも勧めながら、彼女は言つ。

「まあ流石に悪いと思つたから、こりまして顔を見に来てあげたのよ。」

「

可愛らしく微笑むが、悪いと思つならツケを払つて欲しい。

本当に勝手な巫女だ。

「君がここに来るのは、いつものことじゃないか。それを対価にさ

「… れてもね。」

溜息と共に吐き出す。

「… それもそうね。うん、こつもの事よね。」  
と愉快そうに笑う。

「… といつわけで、ツケを払うなり買い物してくれてもいいんじゃな  
いか？」

呆れながらいいやる。

まあ、それはないだろうが。

「それもいいかもね。」

と彼女は立ち上がる。

明日は槍でも降りそうだ。  
彼女がまともに買い物しようなんて言つのだから。

「… といつわけで、何かお勧めの物はないかしら店主さん。」

本当に楽しそうに笑う彼女。

やれやれ、と立ち上がり彼女が好きそうな小物類を勧め始める

まったく、そんな顔をされたら、適当にあしらえないじゃないか。

7話 いつもの事と違つ事（後書き）

結構すぐ調子狂うんだね。

仕方ないね。

血のように紅いワインを、彼女に注いでいるところの中々考えてしまつものがある。

お互にグラスを掲げ、小さく乾杯。

細やかな宴が始まった。

余り飲む機会が無いが、ワインも中々悪くない。

静かに、落ち着いて飲めるものだ。

酒もそうだが、二人で静かに飲むのならワインだらう。

グラスに注がれる紅は、それだけで絵になる。

それも楽しむために、つきあいをする相手が必要になる。  
自ら注いでは、風情がない。

注がれる紅は、不思議と魅入つてしまつ。

半分ある妖怪の部分がそつとせるのか。いや、生物としての部分が何かを感じさせるのだろうか。

「知を追つのは良いが、礼を尊ぶのも忘れないで貰いたいね。」

「…すまない。」

はつと気付き、苦笑いを浮かべる。

はあ…。

じつこう奴だと知ってるが、せめて今は皿を向けて欲しいものだ。

グラスを傾け、味わう。

芳醇な香りが口内に広がり、鼻へと抜ける。

飲み干し、微かな酸味の余韻に浸る。

ワインを味わう為に、嗅覚も必要といつのも頷ける。

また一口、味わう。

頭の中が静かになったのか、私との会話が成立し始めた。

ワインについて、その歴史や楽しみ方、さらには食べ物との組み合わせなど、話題は尽きない。

静かに歓々と続けられる宴。

騒がしい宴会も楽しいが、じつにも有りだ。

グラスを傾け、会話を楽しむ。

月光の下、吸血鬼と飲むワインは、中々に感慨深い。

彼女は、多少やつかいだが上密である。

交流を深めても損はない。

暇潰しの為に色々おかしなことをやるが、長く生きる妖怪にとってはそれも普通である。

もっとも、店の近くでの弾幕は勘弁して欲しい。

槍が降つて来たときはどうつかと焦つてしまつたし。

やや紅く染まつた彼女を見やる。

ワインは染み抜きするのが大変らしいが。

スカーレット・デビルの異名は伊達ではない、と言いつていいか。

「レミリア。」

名を呼び、自分の首下を指で示す。

いまいち分からぬ彼女が、自分の服の同じ箇所を見る。

途端に、みるみる紅くなる。

本当に紅がついて回るものだ。

瞬きの間に着替えさせられた彼女を見ながら、ワインを一口。

紅い顔で、紅いワインを飲む、紅い館の主。

外見相応の反応が、今は微笑ましいものに感じる。

月を見上げ、ワインを飲み干す。

こんな夜も悪くない。

8話 非魔月葡萄（後書き）

月夜に、悪魔っぽくないお嬢とワインを飲み、思考に漫かります。

お嬢はやっと暇が潰せました。

ちなみに檜を降らせたお詫びです。

酔つてるから、溢しても仕方ないね。

空氣を読む従者は至みねえな。

私の頭はだらしねえ。

かくして幻想は世を包み、古き歴史は紐解かれる（前書き）

この話だけは、完全に独立した番外編です。

もう完全に妄想。

そして空回りし過ぎてバターになりそう。

かくして幻想は世を包み、古き歴史は紐解かれる

紅く染まつた山々も、夜の帳が降りて、ただ黒く。

欠けた月が、その黒に薄い青を塗り、秋の夜が姿を現す。

静かに草木を揺らす、物憂げな夜風が草木を撫でる。生じた音に、虫たちが合わせて優雅な演奏となる。

静かで優雅で、物憂げな調べ。

静寂の縁側に、哀愁をも含んだ幻想の調べが届く。

静寂と哀愁の、秋の夜長。

天と杯には月が浮かび、輝く月と、揺れる月が静かに輝く。

杯を傾け、芳醇な香りと僅かな月の狂氣を放つ酒を煽る。

喉を焼くような余韻が微かに残り、やがて消える。

耳と目と舌で、幻想の秋を味わう。

再度杯に酒を満たし、月を浮かべる。

波紋を伴い、優しく揺れる月は移ろいものの現れか

頭に浮かぶはあの娘達。

こうして、独り杯を煽っている間も、神社ではいつものように魔理沙が酒宴を開き、いつものように咲夜が料理をし、いつものようにテヅキのサリの下で樂しんでいたのだろう。

：時間の流れは止まらない。

そして、それに引かれて日々も変わって行く。

今は昔の幻想郷。

過ぎ去る日々と変わり行く日々。

見送る者は、前を向かされ進んでいく。

過ぎ去りし日々は、戻らない。

されど、日々の記憶は我が身と共に、明日へ向かう。

記憶が続く限り、彼方まで

気が付けば、用意した酒が最後の一杯。  
胸中に浮かぶ、去りし日々。

杯を高々と挙げる。  
精一杯届くよう。

…用と、在りし日に…乾杯。

ゆづくづく、瞼が落ちてくる。

些か飲み過ぎたが、今日に限って客かではないと思ってしまうのは、  
半人の部分の提案か。

片付けは、明日でいい。  
寝床も、ここで。

今は怠惰に、この『よい』と『幻想』の余韻を楽しみたい。

意識を手放し、夢を想う。

今は遠く、けれども色褪せないユメを

月夜の縁側に眠る、店主。

未だに彼は夢の中、過ぎ去りし日々を懐かしむ。

半人の彼は、多くの人を見送り、前を向いても過去を見る。

かの人達を忘れぬために。

半妖の彼は、多くの人を記憶し歩みを進める。

誰からも忘れられた、本当の幻想にしないために。

それが、見送る彼の手向け。  
そしてかの人達との絆。

彼と共に歴史書は絆の証。  
彼との絆が記されたそれは、幻想のなかにあっても決して色褪せる  
事無く在り続ける。

綴られた日々、綴られた人達は、それが有るかぎり、色褪せず、彼  
と共に在り続ける。

遙か遠い、彼方まで。

秋のとある日とある場所

一冊の、古い歴史書が紐解かれる。

『幻想』に飲まれそうになりながら、しかし確かにその歴史を伝える歴史書が。

開かれたそれは、在りし日の姿を映し出す。

綴られた日々と人達を、何度も

ユメを見よう。

確かに在った、

いつまでも色褪せない、

幻想のユメを

かくして幻想は世を包み、古き歴史は紐解かれる（後書き）

古い幻想を書き綴つた、歴史書のお話。

店主と彼女達の日々が書き綴られた歴史書の、  
諸般の事情に左右され続けた歴史書の、

待ち焦がれた歴史書の、お話。

怠惰で夢想家な店主と、  
素敵な巫女さんで紅白だつたり、  
普通で魔女つ娘で白黒だつたり、  
瀟洒なメイドでズレていたり、  
胡散臭かつたり、半人前だつたりする人達との日々が綴られた、微  
笑ましい歴史書のお話。

ああん？お密さん？（店の）

あんのかあ？（代金を払つお密が。）

何気ない日々を綴つた彼の歴史書は、歴史書と云うには余りにもお

粗末かも知れない。

けどそこには、『歴史』には見えない、確かに生きていた人達の、日々という歴史が、色褪せずに記録されている。

それらは、時がたつにつれて誰からも忘れられ、『幻想』に埋もれてしまうかもしない。

でも店主と歴史書がひつそりと、力強くそれを掘り起こす。

半分人間であるが故に過去を懐かしみ、大切にする。

半分妖怪であるが故に、未来に進み、見送り続ける。

歴史書の記録を記憶とし、彼女達の日々は、店主と歴史書と共に在り続ける。

なんてね。

あの店主がそんなことするもんか。

あのひねくれが素直にそうするもんか。

でもするんです。

私が書いたから。

はい解決。

どうこうことなの...

言わずもがなテンションMAX。

仕方ないね。

深めに掘つた穴に、丁寧に埋める。

外から、こちらに来てしまつた故人を想い、手を合わせる。

せめて、安らかに。

暫く来てなかつたせいが、供養する人の数が多く、いつの間にか太陽が、真上を越えてしまつていた。

まだ焦るような時間ではないが、早めに用事をすませることにした。

地面に目をやり、隈無く落ちていいのを探しては拾つて行く。

拾つた道具を調べ、分別して、次の道具へ。

分別は、道具が使えるか、死んでいるかを見る。

使える物は腹部のポーチへ入れ、既に死んでしまった道具は一ヶ所に集め、後で供養する。

道具の死とは、道具が持つ用途が見えなくなつた時と、使う人がいなくなつた時だ。

前者は、どうしようも出来ないが、後者は違つ。

道具は使われてこそ、その使命を全うできる。  
まだ使える道具を、そのままに捨て置くなど、道具に対する冒涜で  
しかない。

それは道具自らの使命、存在そのものを否定することになる。

そんな振舞いが許されては行けない。

だから、僕は道具を拾い、持ちかえる。  
次の主を、僕の店で待つてもらうために。

粗方探し終え、遺体を火葬した所に戻る。

僕のここでの最後の仕事だ。

火葬の際に、燃焼の邪魔になるものをまとめた箱を覗き込む。

先ほどの通り分別を行い、供養するか持ちかえるか決める。

遺品を持ちかえるなど罰当たりだ、と憤慨する人は、僕から言えば、道具を想えない可哀想な人だ。

理由は先ほどの通り。

分別も進み、最後に煌びやかな腕時計が残った。

もう尋ねる人がいなくなつても、健気に時を刻む

この時計が、針を止めないのは、自身の使命を果たしたいと願つて  
いるからだ。

その願いを無下にするなど、僕には出来ない。

準備中の札を、商い中に変え店内に入る。  
なんとか、日が暮れる前に戻つてこれた。  
今日の成果を勘定台に乗せて行く。

クマン『腕時計』：

今日は既に店に在る物が多いな。

少しの落胆と共に、それらを収納箱に入れた。

最後に拾つた時計は丁度切れていたため、棚に並べる。

：一応綺麗にして、清めておくか。

時計の作業も終わった頃には、太陽も沈もうとしていた。

時計を棚に並べて、いつもの椅子に座る。

茶を入れて、飲む。

多少疲れた心身に、程よく染み渡る。

：結局、帰つて来てから来客は無しか。  
そして当然売り上げも無し。

まあ、道具には縁がついて回る。

変に焦つても、道具の縁を引き寄せることは限らない。

腰を上げ、扉の札を準備中に変える。

今日はもう店仕舞いだ。

椅子に座り、本を広げる

仕入れに行つた分、今日は余り本を読めなかつたし、丁度いい。

店の方は、明日の縁に期待しよう。

秒針と頁が進み、秋の夜も更けていった。

閑話休題　思入れ（後書き）

思考を入れた仕入れの話。

入ったやろ

ん、ん、ん、ん、ん、（否定）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0102o/>

---

東方非想ZUN則

2010年11月3日13時38分発行